

第一章 ティアモ編

今日は戦闘訓練をしていたところで、屍兵があらわれた。

幸いなことに今は真夜中ではないため、全員がすぐに戦闘態勢に入ることが出来た。

ティアモはいつものようにペガサスにまたがり、すぐ隣で待機している。

自分は軍師であるため、地形や屍兵が持つ武器のタイプを見ながら、誰がどの位置に行くのかの指示を出していった。戦力を見て、あとはもう大丈夫だろうと判断した。

「ティアモ、僕も一緒に乗りたいんだけど、いいかな？」

「ええ、じゃあ後ろに乗って」

差し出された手を掴んで、ペガサスの上に乗った。ティアモの後ろにぴったりと密着する。

この体勢は二人一組となって敵を攻める「ダブル」の形であり、戦場では珍しくもなくよく見られる光景でもある。

地形に足を取られてしまう場合や、アーマーナイトなどが移動する場合などにも活用される戦術だ。軍師としても、戦況を全体で把握することは大事だった。

「ちよ、ちよっと……近すぎない？」

「そうかな、それにしても……こうやって戦闘中に後ろから触れられるのもいいね」

「……馬鹿なこと言わないで。今は屍兵が襲って来てるから、油断したら危ないわよ」

戦闘中で当たり前とはいえ、真剣なティアモは可愛かった。

ペガサスに乗ると前傾姿勢になるため、今のティアモの体勢は、まるでバックから犯しているかのような状態を彷彿とさせる。

スイッチが入ってメロメロになったティアモはこれ以上ないほどだったが、天才とも言われるティアモの顔のまま、ベロベロにしてみたくなってきた。

どうやら自軍の戦力は申し分がなく、クロムたちがほとんどの屍兵たちを倒していった。予想通り、あとは放っておいても勝手になんとかなるだろう。

「ねえ、さっきからあなたの指示を待っているんだけど……」

「じゃあ、あそこに行ってくれるかな、あの草むらで何か光っている辺り」

「あそこね。分かったわ」

ティアモが答えると同時に、ペガサスが空を走り出していた。

普通の馬ではなく空を飛ぶ馬であるため、地上から五メートルほど上空に浮いている。

「ここなら周りからもばれないかな」

「ちよ……ちよっと、まさか……」

「ほら、前に約束をしたよね。ティアモは僕専用なんだから、いつでも好きなようにやりたいたいことをしてもいいって」

尻を突き出しているティアモに、反り返って固くなった肉棒を密着させる。

「その約束は……確かにしたわ。でも、こんな戦闘中にそんな非常識なことできるわけないでしょ!？」

やや怒った口調で、信じられないと言わんばかりに睨んできた。これは正論だった。

「そうか、じゃあやっぱりの約束は守れないってことかな。残念だ」

「そ、それとこれとは話が別よ。今は戦闘中だから……ッあんツ」

ティアモの身体に腕を回す。胸は鎧の胸当てで直に触ることができないが、下半身はスカート状になっている構造のお陰で、その中にまで手を入れて触ることが出来た。

「じゃあティアモは戦闘に集中してるっていい。それとこれとは別なんだから、僕はティアモの身体を触ってるよ」

「ちょ……ちよっとッ下着の中に手を……ッああッはあ……んツ、ああッはうう……ッ
っ」

戦闘態勢のティアモは置いたまま、スカートをめくってティアモのパンツの中に手を入れる。中は蒸れて汗をかいていたが、それとは関係なく股間の部分がぐっしりと濡れていることが指先から伝わってきた。

「ティアモ、ここ濡れてるけど……まさか戦闘中なのに感じてないよね？」

「そ、そんなことあるわけじゃないっ……汗よ。早く、手を抜いて……ッ!」

「ほら、ここなら下から誰にも見られないし、そんなに気を張っていなくても大丈夫だよ。戦局も安定しているし問題ない」

どうやらティアモは割り切って考えるところがあるようで、スイッチが完全に切れている時にはそういう気分になってくれないようだ。

頑なに拒否を続ける態度からして、ティアモは根がとても真面目なんだろう。

「そろそろ、本気で怒るわよ……っ?」

「わかった、じゃあやめておくよ」

そう言いながら、ティアモの下着の中の指を奥に入れ、秘所をまさぐり始めた。

「ん……ッんん……はあ……ッはあ……や、やめてない……じゃないい……」

ぐちゅぐちゅ……ぐちゅ……ッ

汗をかいているため、メスの匂いがたっぷりと充滿しているそうなのに顔を埋めたかったが、上空五メートルでは、とてもそんな体勢にはなれない。

指で小刻みにかき混ぜ、ティアモの中に少しずつ指を侵入させていく。

「はあ……あんツ指……ゆびが入ってきてるわ、ちよっと……ッやめるって言ったのに
ッ」

「やめる、やめるよ。少しだけ挿れるだけだから」

「んん……ッ少しだけなら……いいけど……ッんん……ッあん……っ」

緊張がほぐれてきたのか、ティアモの中を指でかき回してもいいとお許しが出た。

ぐちゅぐちゅとかき混ぜている内に、水気のある音が聞こえてきた。

「あーあー、もうぐちやぐちやだね。ティアモの身体は正直だなあ」

「はあ……ッはあ……あッこんなことされたら……我慢できるわけないでしょ……っはあっ、はあ……んッ」

前傾姿勢のまま、ティアモは脱力して前に崩れた。

うーん、この状態で挿れるのは難しい気がするな。

「ティアモ、ここまでしておいてなんだけど、これ以上のことはペガサスの上では出来ないとと思うし、危ないからやめておくよ」

「そ……そう……ッ、はあ……はあ、こんな状態で……やめるなんてえ、もう……ッッ！」

「大丈夫だよ、しっかり指でイカせてあげるから。ほら、ずっと我慢してたんだから、もう楽になるといい。ちゅ……ちゅッ」

背後からティアモの顔に近付いて、耳元を下から舐め上げていく。

さつきから固くなっているクリトリスを指で弾き、摘みあげる。

「あああんッっ！ くる……うッいく……ツイク……だめえッッ！！」

プシャアアアアアアアアア！！！！

ビクンと全身を痙攣させ、ティアモは絶頂に達した。同時に指を挿れてかき混ぜていた秘所から、勢いよく水を噴き上げた。

「ああ、お漏らしをしちゃったみたいだね。ティアモ？」

「あ……ああはあ……ッこ、こんなところでえ……あたし、あたしい……ッ」

「大丈夫、大丈夫だよティアモ」

絶頂の気持ち良さと、お漏らしをしてしまった羞恥心が混ざり合い、さらに今が戦闘中であることから、ティアモは目に涙を浮かべていた。

こんな生死を懸けた戦闘中という状況で何をしているんだという話で、真面目なティアモなら、どう思っているのかぐらいは見当がついた。

「う……うッうう……ッあたし……ッ」

「ごめんティアモ、そこまでするつもりじゃなかったんだ」

人前でも気丈に振る舞うティアモが、羞恥心やら入り乱れて、涙をすすっている。

肩が震えているので後ろから抱き締めてあげた。

「うん……、私も我慢できなかったから……気にしないで。皆が戦ってる中で、何をやってるのかって考えちゃったから」

よしよし、とティアモの頭を撫でてあげると、嬉しかったのか身体を委ねてきた。やはりティアモは可愛いと実感する。

「ほら、クロムたちが手を振ってる。戦闘は終わったみたいだ。誰もケガをしてないようだし、上手くいったよかった」

「うん……、後で時間があったら……ちゃんとしてくれるかしら……？」

ティアモは恥ずかしそうに後ろを見ると、目を合わせないままそう言った。

「いいよ、いつでもやりたい時にしてあげるから」

「うん、約束だから……」

そして、ティアモはペガサスを急降下させ、クロムたちと合流した。

何事もなかったかのように振る舞うティアモだったが、スカートの裾からは水滴が垂れた跡を残していた。

あれだけ気丈に振る舞っている彼女が、さっきまで下着の中に手を入れられて喘いでいたとは誰も思わないだろう。

「……！」

ティアモは僕に見られていたことに気付くと、少し怒ったように見えた後、口元に人差し指を当てていた。

内緒、ということだろうか。

誰かに言うつもりはないが、ティアモの身体の火照りを早く冷ましてあげないといけない。

戦闘中という緊張感のある時ほど、ティアモと身体を重ねたくなってくる。

さつきから我慢ができなくなった分は、後でティアモの膣内にぶつけてやるとしよう。

第二章 イタズラ くマーク編く

(中略)

すると、マークは突然に着ているローブを脱ぎ始めた。

ゆっくりという提案を出した途端に却下され、自分から服を脱ぎ始める娘のマーク。

この子は本当に危険かもしれない。

時と場合を選ばない人間は、爆弾になる可能性が高い。

その爆弾は自分に付きまとい、それがいつ爆発してしまうかは分からない。

それならば、その爆弾は早めに爆発させて、鎮静化させておくのが一番だ。

「分かった、僕も覚悟を決めたよ。マークの身体を、今から僕が容赦なく犯すよ」

「嬉しい……ッ。父さんッ父さんッ！」

パアッと表情が明るくなると、マークは下着姿の状態を抱きついてきた。

犯すと言ったのに、何のためらいもなく喜んでることに、背筋がぞくりとした。

でも、これでいいかもしれない。さっさと犯して、僕の言う事に絶対服従させよう。

そうしなければ、何かまずい気がする。マークを見て直感的にそう感じていた。

コンコン。

その時、ドアがノックされた。

「ねえ、あなた……いる？」

声を聞いて、背筋が凍りつくのを感じた。

ティアモだ。扉の板を挟んだ向こう側に、妻のティアモがいる。

僕は頭の中で考えられる最高の行動パターンを高速で処理すると、ティアモが扉を開ける数秒の時間の間に、それを実行に移した。

下着姿を抱きついている娘のマークと一緒にいるところを見られたら、どう言い訳して

いいのかわからない。

マークも軍師を目指しているだけあって、僕の考えを読んでもくれたようだ。

さすが自分の娘だけはある。

「……入るわよ？」

ガチャリ、と扉を開けて入ってきたのは、案の定ティアモだった。

「ああ、なんだいティアモ？」

「……………」

「……………」

机の下にマークを隠し、僕が椅子に座ることで、ティアモの方からは完全に何も見えな

い状態を作ることに成功していた。

マークにゆっくりと服を着させる時間はなかった。やや狭い思いをさせるだろうが、見

つかるよりはずっといいだろう。

ティアモが何かに気付いた様子はない。

「誰かいたの？ 話し声が聞こえた気がしたけど……」

「さっきまで一人で次の戦局をどう乗り切るか、声に出して考えてたんだ」

「そう。あのね、私達の娘のことなんだけど、セレナとマークがいるじゃない？」

ピクッ、と机の下にいる下着姿のマークが反応した。

「あたし……まだ母親になったことなんてないから、どう接したらいいのかわからなくて、

あなたは どう思ってるのか聞きたかったんだけど……」

ティアモは不安そうに、話を始めた。

すぐに言葉を返そうとしたその時、足元にいたマークの手が動いた。

黙ったまま僕の両足を開かせると、その中央に入り込んで股間を手で触り始めた。

その手つきがいやらしく、マークが上目遣いで見上げてくる。

こ……この娘、やっぱり駄目だ、このまま放置していたら……大変なことになる。

「ぼ、僕も父親になんてなったことないから、同じだよ。ティアモが考えてる心配のことは、僕だって同じ分だけ心配がある。けど、セレナやマークは未来では寂しかったり悲しい思いをさせてきたみたいだからね。出来るだけ、一緒にいたり、尽くしてあげたいと思ってるよ」

ぴちゃ……ぴちゃ……ツちゅ……ツ

マークが僕の下着を下ろして、その中から肉棒を取り出ししていた。そして、そのまま肉棒を舌先で丁寧舐めている。

その顔を見ると、マークはとても嬉しそうだった。

実は彼女が服を脱いでいた時から、逸物は固く勃起していたが、マークはそれに悦んで舌を這わせている。竿の部分から、ゆつくりと舌を上にかかし、亀頭のくびれを丹念に舐めていく。

まるで汚れを落とすように、マークは亀頭のくびれを舌先で舐めていた。

「そっか……そうよね。あの子たちは必死に頑張ってきたんだから、それを褒めたりしてあげればいいわよね。何か……分かった気がする。ありがとう」

「そうそう。気にしないで一緒に居てあげたりするのが、すごく喜んでくれると思うよ」
ティアモの顔から不安が取れ、明るい顔になってくれた。

「はあ……ッはあ、父さんのおちんちん……ぴちゃ……ちゅっ……ちゅるる……ッッ」
現在進行形で、マークが机の下で僕のモノをしゃぶっている。

妻であるティアモと会話をしながら、下半身では自分の娘にフェラをさせているという背徳的な状況。

どうしてこうなったのか分からないが、ティアモとの会話も終わったため、なんとか乗り切れそうだと思った。

「じゃあ……行くわね。今日の夜はゆつくり出来ると思うから……その……」

「うぐ……ッ！」

ティアモの言葉を聞いた途端、マークが僕のモノに歯を立てて噛んだ。
涙が出そうなくらいの激痛が走るが、声を殺してなんとか我慢をした。

「ああ、夜を楽しみにしているといい」

そう言うと、ティアモは頬を染めたまま部屋を出て行った。

「はあ…………」

扉が閉まり、すぐく長いため息が出てきた。

これからどうしてくれようか、机の下で、まだ飽きずに肉棒をしゃぶり続けている僕の娘を。

「ちゅッ……ペロペロッ……っんはぁ。父さん、私の舌は気持ちいい？ 男の人のつて初めて見たからちよつと恐かったけど、父さんのだと思ったら興奮しちゃった」

「……言いたいことはそれだけかい？」

一歩間違えば家庭崩壊の寸前だったこともあり、ニコツと笑うマークの顔がとても腹立たしく見えてきた。

この子は、本当に何を考えているんだろうか。

いや、何を考えているのかなんて、もはや関係ない。この娘は僕とティアモの娘であり、今は一人の「女」として僕の肉棒をしゃぶっているだけだ。

「だって、父さんたら母さんと話して嬉しそうなんだもの。だからちよつとイタズラしなくなつたの。ふふっ、見つかつちやつたら面白かったのになぁ」

「もう怒つたぞ、マーク。悪いことをしたのに自覚がないのなら、お仕置きをしてあげないと。それが親の役目だ。今更恐がつて逃げようとしても遅いからね」

「お……お仕置きなんて、父さんからだったら私はなんでもいいよ……？」

机の下でイタズラっ子のように笑っていたマークの顔を両手で掴むと、その口内に向かって勢いよく肉棒を深く挿入した。

「んぶッ、んぐッんっ、んんんんーっ！っ！っ！」

ズポツズポツズププッ！

「はぁ……ッはぁ、ほら、これをしゃぶりたかつたんだろ？ ノドの奥まで挿れてあげるよ。まったく、手間のかかる娘だっ」

マークの頭の後ろにを指を回して固定し、肉棒の根元深くまで啜えさせた。

「んぐっふ……ッぐんんッ！！ んんんんッ！！」

表情は上からは見えないが、苦しそうにしていることは分かる。

ノドにまで突っ込んだ肉棒を、腰を引いて一旦抜いてやることにした。

嗚咽を漏らしながら、マークの口から肉棒が吐き出される。

「どうかなマーク、少しは反省したかい？」

「ッはぁっ！ はぁッ、ごほッごほ！ とッ父さんひどいよお……ッこんな、こんなこと私にするなんてえ……ッ！ うう……ッぐすっ、うう……ッううっ」

さっきまで笑っていたマークの顔はそこに無く、涙を流している少女の顔があった。

ゾクゾクと背筋が震えてくるのが分かる。

肉棒を引き抜いた口元から、よだれを垂らしたマークの顔がいやらしい。

その顔は、まるで好物のモノを待ち焦がれているようにも思え、よだれを垂らすマークが嫌がっているようには見えなかった。

「お仕置きだと言っただろう。君は危険なところがある。だから今から僕のモノにして、言う事を素直に聞く娘にしてやろうと思う」

「ひい……ッッ！」

さつきよりも固くなつた肉棒を目の前に差し出すと、マークは驚いて後ろに下がろうとした。

彼女の後ろには机があるので下がりがないのだが、本能的な恐怖を感じたのだろう。

「どうして逃げるのかな、マークは僕のこれが欲しかったんだろ？」

「そ……それ、そんな大きいなんて……知らなくて……ッ、わ、私……やっぱりやめておこうかなって……っっ」

「もう遅いよマーク。これを今から君の中に挿れる。泣いても挿れる。泣かなくても挿れる。心配しなくても、何回か腰を振っている内に気持ちよくなってるよ」

マークは首を横にブルブルと振って拒否を示す。

涙を流しながら、ティアモ譲りの赤い髪を振り乱して、まるで命乞いをしているようだ。全身を震わせて怯えている娘の身体を立たせると、机に座らせるようにした。

「あ……あの、父さん……ッ私やりすぎちゃったよね、ご……ごめんなさいっ」

「そうだね、身を持って……理解するといんじやないかな」

上目遣いで僕を見てくるが、謝つたって許すつもりは無い。

「ああ……ッ！」

マークの下着を下ろしてやると、まだ未成熟なメスの匂いが鼻に拡がった。

「なんだ、すっかり濡れてるじゃないか。マークは僕のを舐めながらこんな風感じてたんだね。なんていやらしい娘なんだ」

「ああ……ッあッ、だめ……ッだめ、父さんっ父さんが……ッ！」

グチュッ、ジュププッ、ズプズププッ！

「あああああッッ！ 入ってるッ入ってくるううッっ！ 父さんがあ……ッとつても固いオチンチンが……あはあッはああ……ッッ！」

第三章 娘 〈セレナ編〉

(中略)

「父さん聞いてんの？ あたしはなんか腹が立ってきたの。父さんはこんなにかっこよくて、すごい軍師で王家の人や皆からも一目置かれるような存在なのに、母さんはあんまり分かってないっていうか、おかしくて……」

「……セレナは僕をそんな風に見てくれたんだね。嬉しいな」

「あッ！ ちっちがうしっ、今のは言葉のあやまって言うか、ちがうの！ とにかくあたし

はあの人の父さんに対する態度が気に入らないの。あんなんじや、父さんは他の女の人の目移りしちゃうんじゃないかって、心配で……………」

セレナが不安そうに視線を落とす。そういうことだったか。

目移りというか、既に娘であるマークと関係を持ってしまった時点で、セレナの思っている以上に危険な状態なのかもしれない。マークはセレナの妹でもある。

僕は椅子から立ち上がると、セレナのすぐ側に近付いた。

「セレナは優しいね。いい子に育ってくれて、嬉しいよ」

「子供扱いしないでよッ。あたしは母さんの態度が気に入らないの。なんでも出来る天才だからって、父さんを放っておいたら振り払われ、彼女は抱きついてきた。」

セレナの頭を撫でていたら振り払われ、彼女は抱きついてきた。

「え……、セレナ？」

「あたしが父さんを取っちゃえば、少しは母さんも気付くよね？」

何を言ってるんだ、この娘は。

「父さんはどうなの？ あたしじゃだめ？ やっぱり母さんみたいな人じゃないと好きじゃない……………」

セレナは泣きそうな顔で震えている。

「そんなことない、セレナは可愛いよ。僕の娘としてもそうだし、娘じゃなかったとしても好みだよ」

「……そ、そこまで言われると恥ずかしいんだけど。あたし父さんに告白されちゃった」

正直に思ったことを伝えただけだったが、セレナは顔を真っ赤にすると、視線を下に逸らしてしまった。

反射的に口から出てしまった言葉だったが、セレナは満更でもない様子だ。抱きついてきているセレナの身体から、体温が伝わってくる。

マークと腰を振った件があったからか、今は必死でブレーキをかけて勢いを止めようとしている。マークに続いて、セレナにまで手を出したら危ない。

「あたしも父さんのこと好きだし、これって変なのかな……………なんかドキドキして、やばいっていうか……………父さんさつきから、あたしのお尻触ってるよね……………」

「あッ！」

手が勝手に、気付いたらセレナのお尻を両手で揉みほぐしていた。

むにゅむにゅと何かやわらかいものが心地良いなと思っていたが、手を離すつもりはなく、逆にもっと触っていたい気分になってくる。

「……………いいよ、父さんなら。こうやって直接触られるのも嬉しいし、未来じゃ父さんとこんな風に触れ合うことさえ出来なかったから……………ッ」

「そうか……………寂しい思いをさせてたんだね、セレナ」

「はあ……ッはあ、ん……ッんん……ッ父さんそこ駄目え……ッっ」
尻肉を揉みほぐしながら、指先はその中央へと動かしていった。尻肉を外に拡げるようにした後、ぷっくりとした未成熟な恥丘を指で擦りあげていく。

「あん……ッいやらしい手つきい……ッ父さん……ッはあん……はあ……あんッ」
感覚が良いのか、割れ目のスジを指で撫でるだけでセレナは敏感に身体を震わせた。

「セレナのここ、もうぐちゅぐちゅだね。そんなに僕に触って欲しかったのかい？」

「あッ……あッ、ちが、違うしい……ッあたしっこんな慣れてるんだからっ！ 経験だっつてすごいしてるんだからあッ……ひゃあんッ」

生地の上からでも割れ目の形が浮かんでくるほど濡れており、セレナの秘所はすっかりとろけてしまっているようだ。

経験豊富とか強がりで言っているのがバレバレだが、もう少し可愛がってあげよう。

「そうか……セレナはそんなに遊んでる子だったんだね。親としてはちよつと悲しいな、僕がセレナの初めてをもらえるかと思ったのに……」

「あ……ッうそ……ッごめん父さん、さっきのウソなのっ！ 父さんっ父さんに初めてをあげるんだから……っだから、あたしのこと嫌いにならないで……っっ」

セレナは僕に視線を向けながら、必死に弁解をしている。

なんでこんなに必死なんだと思えるほどだったが、強がりをするほどに、セレナが可愛く見えていく。

指の動きは割れ目のスジをなぞりながら、そこ以外は触らずに、ひたすら焦らしていた。「嫌いになってならないよ。セレナはこんなに可愛いんだからね。それに、本当に初めてを僕がもらってもいいのかな、セレ……んんんッ！」

「ちゅ……ッチュッ……ッ」

そんなのは決まってるじゃない、という言葉の代わりに、セレナがキスをしてきた。

これは危ない、自分の娘なのにセレナに肉棒を挿れたくてたまらなくなってきた。恥ずかしくてキスをしてくるというのもセレナらしい。

「っはあ……はあ、早くして欲しいから……ここに来たんだし……」
策にはめようとするマークと違って、この子は素直な娘だと感じる。

強がりを目に見せるが、すべてが愛情の裏返しなのが胸に来る。

「本当にいいんだね、セレナ。本気でするよ？」

まだ不安そうなセレナの意志を確認すると、ゆっくりだが頭をうなずけた。

ここまでの覚悟があるのなら、最後までやるのが男というものだ。

抱きついていたセレナの身体を机の上に座らせる形にして、さつきから股間がびしょ濡れになっているセレナの服を下半身から脱がせてあげることにした。

傭兵の格好のセレナは、下にズボンを履いている。それを下ろしてあげた後、びしょ濡

れになったパンツが目飛び込んできた。

「あ……あの、父さん……すっごい恥ずかしいから見ないで……っ見ないで！」

「あんまり力を入れないようにね。力を入れすぎると、これが入らないかもしれないから」

「はあ……ッはあ……ちよっ父さんの……すごすぎ……ッ、ちよ……ッちよっと待つ」

実はセレナに抱きつかれた時から固く勃起していた肉棒を取り出すと、セレナは信じられないものを見たような顔になった。どうやら怖気づいてしまったようだ。

しかしセレナの秘所はすっかり指でほぐしてあるので、いつでも挿れられる準備は整っていた。

「ちよ……ちよっと父さん、心の準備させてくれない……？ こんな大きい……っ」

何かさっきから待つて待つてと喚いているが、ここまで来るとさすがに待てない。

セレナのパンツを脱がせると、ぴったりと閉じた秘所が露わになった。

まったく遊んだことのない、誰にも汚されたことのないメスの穴だ。まさか本当に処女だったとは驚いたが、セレナは恥ずかしいやら怖いやらで、少し震えている。

秘所のスジをなぞりながら、さっきから待ちきれなくてよだれを垂れ流しているセレナの穴に肉棒を固定した。

「お、お願いッ父さん、お願いだからちよっと待つてッ！ こんなの絶対入らな」

ズズズズズッ！ ブチブチブチッ！！

「ッあああああっつっ！！ いたあいつっ入ってッ入ってるううッっ！！」

「くううッはあ、入ったよセレナ。大丈夫、すぐに痛みは引くからね」

「やあッいたい……ッ痛いよお……父さん……ッ！ ひっく……、ひっくッううう」

まさかここまでとは思わなかったが、セレナが処女であることは確実に分かった。

貫かれた肉棒の奥から、赤みを帯びたものが流れてくる。初めて味わう破瓜の痛みに、セレナの涙がポロポロと止まらない。

それでも肉棒は堅く勃起したまま、深々と秘所に突き刺さっていた。

「あんまり大きな声を出さないようにね。誰かが来たら大変なことになるから。痛みが和らぐように、ゆっくりしてあげるよ」

「き……キス、キスして……父さん……」

「よしよし……、チュッ……ちゅっ」

余程痛くて仕方が無いのか、セレナの身体の震えが止まらなかった。

だがキスをしたことで、膣内がじわりじわりと愛液で満たされていくのが分かる。

これならもう少し動いても大丈夫だろう。

普段なら、相手が誰であろうと乱暴に腰を打ち付けるところだったが、実の娘でもあるセレナは可愛すぎるためか、腰をゆつくりと、セレナの反応を見ながら動かしてあげた。

第四章 みんなの部屋 くマーク、チキ編く

部屋に来たのは、マムクートのチキだった。

マムクートは人間より遙かに長く生きられる種族らしく、チキは神話にもなっている英雄王マルスがいた時代から今まで生き続けていて、神竜の巫女と呼ばれている。

「ねえ、何してたの？ とてもいやらしい匂いがするわ……」

「ええと、一人で戦局の想定をしていただけだよ」

「そう。さつき、部屋からあなたの娘が出てくるのを見たけど、それも関係ない？」

ああああ、さつきマークが出て行ったことがばれている。

チキは少し頬を赤く染めながら、この部屋の違和感に気付いているようだ。

さすが、三千年も生きていただけあるか……これでは隠せないか。

「関係あるかな。チキは、気になるのかい？」

「ええ。だって、あなたたちは親子でしょう？ 親子でいやらしいことをしているなんて

……おかしいわ。とつても」

もう許してくれと言いたかったが、チキは許してくれそうにない。

「……チキ、お願いだから、ティアモや皆には黙っていてくれないか？ もし誰かにばれたら、僕は終わりだ」

「そうね、別にあなたを責めているつもりはないのだけれど、少し興味深かったから。黙っていてもいいけど、私にもしてくれる？」

「え……？」

思わず聞き間違えたかと思ってチキの顔を見ると、チキは視線を下に落としたまま、恥ずかしそうに頬を染めていた。

「今のは聞き間違いかな、してくれって……？」

「ええ。私にもして欲しいって言ったの。してくれたら、黙っててあげる。してくれないのなら、皆に言いふらすわ」

「チキにエツチなことをさせていただくよ……」

「うん」

大人なのに大きい子供にしか見えない無邪気な笑顔だった。

本当に大丈夫なのだろうか、どんどん深みに、泥沼にはまっている気がする。

自問自答をしながらチキの瞳を見ると、透き通るほど綺麗な色しており、吸い込まれそうな気持ちになった。

なんて、穢れのない目をしてるんだろうか。

「チキ、一つだけ言っておきたいんだけど、ここは、みんなの部屋。だから、いつ誰が部屋に来るか分からないんだ。もし誰かに扉を開けられたら、すぐくまずいって分かるよね？」

「そうね、私もまだ何をされるのか分かっていないけど、あなたが困ることだけは分かるわ。じゃあ、少しでもエッチなことをしてくれたら許してあげる」

「うん、ありがとう」

まるで子供と話しているような気分だが、チキの身体は立派な大人だった。

特に黙っていても自然と目が向いてしまうぐらい、チキの胸は自己主張が激しい。

着ている服のせいもあるだろうが、露出が多くて誰かに触って欲しいと言っているようだ。

「ここが気になるの……？」

じつと凝視していたからか、チキも気になってしまったようだ。

胸に手を当てて、やや恥ずかしそうにこちらを見てくる。

「……触ってもいいかい？」

「ええ」

チキの機嫌を損ねたら、僕は明日にはティアモのヤリによって屍兵になっているかもしれない。なので、慎重に言葉を選んでいた。

同じマムクートでも、ノノの場合は、まだ見た目も性格も子供のようだったので会話もしやすかったが、チキは完全に大人だ。

「じゃあ後ろから失礼するよ。チキの胸は本当に大きいね。こんなに良い身体を長い間持て余してたのが、もったいないぐらいだよ」

チキの背後から、乳房を下から持ち上げるようにゆっくりと揉み上げていく。

このボリューム感は、ほかの誰よりも大きいと指先で感じる。

「あ……ッいやらしい。こんなことをしてきたのは……あなたが初めて。すごく身体が熱くて……おかしくなりそう……っあッ、はあ、はあ……ああんッ」

「初めてって、今までこういう風にされたことはなかったの？ こんな胸の開いた服で迫られたら、どんな人間だってイチコロなのに」

少女らしい反応が可愛らしく、胸の大きさとギャップも激しい。

ゆっくりと乳房を揉みながら時折り乳首をつまんであげると、敏感に身体を震わせてきた。

誰かが来るかもしれないため、早く終わらせなければという気持ちがありながらも、チキの豊かな肉体は男心をくすぐってきた。吸い付いたように指から離れない柔肉が、両手で揉んでも揉みきれないほどのボリュームがたまらない。

「はあん……ッ今までこんなことをしてくる人間は……いなくて、私のことを見たら、サ
イリみたいに特別扱いされたり、崇められたりするだけで……っはあ、はあ……。ひとり
の女性として見てくれたことなんて、ずっとなくて………」

言いながら、チキの声小さくなっていった。

そりや人間より何十倍も生きていれば、神様のように見られると思うけど、今のチキは
気持ち良く快感を身体で感じている素直な女の子にしか見えなかった。

「そうだったのか。じゃあたっぷり可愛がってあげないとね。こんなに魅力的な女の子な
のに、本当に僕が独り占めしていいのかな」

わざと焦らすよう触り続けていると、チキの方が我慢できなくなったようだ。

「うん……ッ嬉しい。いいよ……ッ私の身体、あなたの好きなようにして……ッさつきか
ら身体が熱くて……っはあ……こんな初めて……」

少女のように敏感な反応を見せるチキを見ると、自分の下半身の逸物がひどく堅くな
っていることに気がついた。チキの胸を触りながらも片方の手を下腹部へやると、それ
を待っていたのかチキの手が上から押さえつけてきた。

「ここもぐちゅぐちゅだね。自分で触ったりはしないのかい？」

「そ……そこ、だめ……ッ駄目……っ、指で……そんなにされたら……ッはあ、はああん
……ッ！ ほ、本当におかしくなりそう……だからッあ……ああんッ」

一度イカせてしまった方がいいだろうと思い、指をチキの服の中に入れ、直接に秘所を
触ってあげることにした。

チキは身体を預けていて、もう好きにすればいいと言っているようだ。

「うわ……すごい濡れてるよチキ。興味が無い振りして、本当はエッチなんだねえ」

「あッ、あ……ッ指、指が入ってくるよ……ッ。あんッすごい……ッ胸も……そこも気持
ちいい……ッ気持ちいいよお……っっ！」

ぐちゅっぐちゅっ！ちゅぷっちゅぷっ

指を秘所のスジに合わせてなぞりながら、中には挿れないように揉みほぐしていく。

すっかり愛液でびしょ濡れになっているので、いつでも挿れられるほどの準備が出来て
いるが、この部屋では事に及ぶのはやめた方がいいだろう。

「あんッ、はあッ何か来る……ッ出る、出ちゃうよお……ッっ！」

ビクンッと肩を震わせ、チキが絶頂したことが身体全体から伝わってくる。

「ああ、イッチちゃったみたいだね。気持ちよかったかい、チキ？」

「はあッああああ……ッああああ……ッふわふわして、すごく気持ちいい……ッおにい
ちゃん、もっとしてえ……ッ」

呼び方がおにいちゃんに変わった。

気のせいかさつきまでよりも子供っぽくなった気がする。

「今はあんまり時間がないからね、次は僕にもしてくれるかな。チキの胸にこれを挟んでほしいんだ」

「うん……いいよお、おにちゃんの言うことなら、なんでもしてあげる」

頬を赤く染めながら照れている顔が可愛らしいが、目の前に肉棒を出した途端、チキの目の色が変わった。

「はあむ……ッ！ ん、ちゅっ……チュパッちゅぱ……っんふう……ッ！」

肉棒を見るや、チキはわき目も振らずにしゃぶりついた。

どれだけ欲求不満になっていたのかと心配になるほど、音を立ててがつついている。

第五章 踏み外した道 くティアモ、サーリヤ、アンナ編く

(中略)

「だって、私の天幕はサーリヤのすぐ側なのよ？ あれじゃ聞いてくださいって言ってるようなものよ。少しは声を抑えてしないと……っっていうかあなた、ティアモと夫婦になっていたわよね？」

「ティアモは僕の妻で、セレナとマークという二人の娘もいるよ……」

「じゃあどうして、サーリヤとあんなことになってるのかしら？ ふふふっ」

アンナは楽しそうに笑っていた。

こっちは全然笑えず、何を言われるのかと冷や冷やだ。

「まさかね、あの軍師様が浮気なんてしてるなんて、思わないわよね。実は最近、商品があまり売れなくて、誰か買ってくれる人いないかなって思ってるんだけど？」

「う……っっ」

この商売人、僕を脅してきたぞ。

さすがと言うべきか、まさか同じ仲間から金を巻き上げようとするとは。

「買う、買わせてもらうよ。けど、僕もそんなにお金がある方じゃないよ」

「あら、払えないのなら、別のもので払ってくればいいじゃない？」

アンナは目を少し細めながら、どこか悪巧みをしていそうな顔をしていた。

僕に近付いてきたかと思うと、アンナは顔と顔が触れそうな至近距離にまで来た。

「サーリヤとしてたこと、私にもしてくれる？」

「え……？」

「……だって、お金がないんじゃない身体で払ってもらうしかないでしょ？ それに……あん

「なの聞いてたら、我慢できなくなるじゃない……」

「言っていることは理解できたが、これは良い展開とは言えなかった。」

「お金はないし、僕はこれ以上……あんなことをするつもりはないんだ」

「あら、そう。じゃあ……仕方ないわね。ティアモにも伝わっちゃうかもしれないけど、その時はあなた、覚悟していなさいよ？」

この女……僕にやる気がないと分かった途端、脅してきた。だんだん腹が立ってきたぞ。

「……条件を飲むよ。アンナを抱けば、黙っていてくれるんだね？」

「ええ、話が早くて助かるわ。なんだかドキドキしてきちゃった」

「さすがに、ここですると皆に気付かれると思うから……」

「大丈夫よ。こんな時間なら、皆ぐっすり寝てるわ」

そう言うと、アンナは僕の首に腕を回して、キスをしてきた。

女性関係をどうしていかで悩んでいたところへ、金銭を交えての脅し。

アンナはマイペースではあったが、僕はとても腹が立っていた。

どうせ抱くのなら、乱暴に犯してしまうぐらい滅茶苦茶にしてやろう。

そうすれば、もう二度と僕のことを言いふらすとか、馬鹿なことは言わないだろう。

「ん……ツちゅ、ふ……あ……ツんん……ちゅっチュッ」

身体全体を預けてくるアンナ。この女、よっぽどしたくて仕方が無いのか。

口を開いて唇を受け入れると、アンナの舌が唾液たっぷりに口内に入ってきた。触れ合うだけの簡単なキスではなく、最初から濃厚なディープキスに、アンナがどんな風にして欲しいのかを望んでいるのが理解できてきた。

「んふ……ツんん……ツっ、ごく……ごく……ッ」

思い切り嫌がることをしてやろうと思い、口の中で唾液をたっぷりと溜めて、アンナの口内へと注ぎ込んだ。

するとアンナは嫌がるどころか、喜んでそれを飲み込んでいく。

「っはあ、はあ……ッ、私はお金の方が好きだけど、お金よりも夢中にさせてくれるかしら？」

「いいよ。いくらでも中に出していいのかな？」

「ふふっ、私は高いわよ。あなたのを挿れるなら一万ゴールド。中に精液を出すのなら五万ゴールドは欲しいところね。払えないなんて言わせないわよ？」

「挿れるだけで一万か……」

これを払わないと言ったら、アンナは怒って、すべてを暴露しようとするだろう。

もはや僕に選択の余地はないのだと、アンナの瞳が意地悪そうに言っていた。

この女は、やはり根っからの商売人だ。

「じゃあ僕がアンナを満足させることが出来たら、それは無しにしてもらえないかい？」

「……いいわ。随分と自信があるみたいだけど、そう簡単にいくと思わないで欲しいわね」

自分はそのままで安い女じゃない、とアンナの顔が言っている。

まあ……僕も簡単にことが進むとは思っていないが、今後のためにも全力でいかせてもらおう。

* * *

「あんツあんツああんツ！ チンポッあはあッすごいいいつあなた……ッ激しくてすごいひひいいいっつ！！」

五分後、アンナはバックから僕に犯されていた。

「はあっハアッ、随分と落ちるのが早いねっ。あれだけ自信があるみたいだったのに……ッこんなものか……っ」

「だ……だつてえ……ッこんなの我慢できないの……ッすごく効くッもつとおッもつとチンポぶち込んで……っ！ 私の中……いっばいかき回してえッ」

パンッパンッ！ぱんっぱんッパンッ！

腰を打ち付ける度に肉棒が押し込まれ、部屋に濁った音が響いていた。

いくらなんでも落ちるのが早すぎるが、アンナの膣内はねっとりとヒダが絡みつき、挿れているだけでイキそうになるほど気持ちが良いおまんこだった。

「そういえばッ中に出したら五万ゴールドだったねっ。やっぱり外に出した方がツいいのかな……っ？」

「あんツいいわ……ッいいわよ……ッこのまま中に出して、私の中に出して……熱い欲しいの……っお金はッはあ……っはあ、もらうけどね……ッあんツあん！」

「この女……ッ少しまけてもらおうかな……っ」

アンナのお尻をさらけ出させる。白く熟れたように丸い桃尻だ。

僕は腰を押さえつけていた片手を振り上げ、アンナの尻に勢いよく振り下ろした。

パチンッ！ぱちんっぱちん！！

「いたッいたいッ！ 叩かないで……っちようだい……ッはあッはあ、痕になったら困るからあ……ッあんツ！ いたい……ッ！」

「どうかなっ中出しをする金額をタダにしてくれるなら、叩くのをやめるよっ！」

「そ……っそんな、あなた……っいくらなんでもお……っあんツはあんツ！ す、すごいッズボズボしながら……痛いのに……きもちいい……っっ！」

痛みを与えるのは程ほどに、肉棒でのピストンを激しくする。快楽を強く味あわせながら、小さな痛みを手の平で加えていく。

叩かれる痛みよりも、肉棒で膣内をかき回される快感を上回せる。

「はあッあはあぁ……ッ何これえ……っ私のからだ、何かおかしくてえ……ッはあッはあ、もつと……もつと叩いてほしいの……ッ！ズボズボしながらッもつと叩いて……ッ」
「仕方ないな、アンナはマゾだったんだね。じゃあ一回叩くごとに1万ゴールドだよ」
「そ……ッそんなぁ……ッ！でもッでもお……くっくっ」
一旦、叩いていた手をぴたりと止める。

第六章 いっしょに訓練中　くマーク、セレナ、チキ編く

(中略)

「オリヴィエには、好きな人とかいないのかい？」

「ええッ！？　ど、どうしてそんなことを聞くんですかぁ……ッ？」

「ほら、好きな人がいたら、その人に話しかけたりするだけでドキドキしたりするじゃないか。積極的にそういうのを続けていくと、結果的に恥ずかしさを克服できると思うんだ」

「……それは考えつかないかったです。好きな人と居てドキドキを克服する……」

オリヴィエは納得している様子だったが、実際に効果があるかは分からなかった。

「好きな人がいなかったら出来ないと思うから、やっぱり別の方法を考えて……」

「……います。好きな人はいますから……協力してくれませんか？」

オリヴィエは真剣な表情で、真っ直ぐに見てきた。

「でも……その人には恋人というか、奥さんがいるんです。私はその人の隣の天幕なんですけど……夜はいつもその、そういう声が聞こえて……とっても恥ずかしいんです」

「……c:」

ちよつと言っている意味が分からなかった。

「奥さんの居る人を好きになってしまったが、その人は夜になると奥さんと……行為をしているから、声が聞こえて恥ずかしいってことかな？」

こくん、とオリヴィエは頭をうなずける。

しかし、それが一体どうしたというのだろう。

今の話が恥ずかしさを克服することに関係はない気がするが……、そもそも好きな人に奥さんがいるという時点で、もうこの話は駄目なような……。

「あれ……、そういえば僕の天幕の隣は……オリヴィエじゃなかったかな……」

「はい、私の隣が……その……」

「え、ちよっと待って。つまりオリヴィエの好きな人っていうのは……」

「恥ずかしいですうッ!」

ああああ、そういうことか。

何か普通の世間話をしていたつもりだったのに、突然告白をされていた気分だった。

オリヴィエは顔を真っ赤にしながら、うつむいている。目を合わせようとしない。

「その、毎晩……僕のせいで眠れなかったんだね。すまない、オリヴィエ」

「いえ……いいんです、ただ……いつも声が聞こえるから、恥ずかしくて」

「言ってくればよかったけど、確かに言いづらいね。すまない。……話を戻してもいいかな、それで僕は、恥ずかしさを克服することを手伝えばいいのかい？」

「え……エッチな声を出さないようにする方法を、教えてください……っ」

「エッチな声を出さない方法……!?!」

何を言っているのかさっぱり分からない。

気付くと、オリヴィエは僕にすぐ近い距離にいた。

まるで告白をしているようだが、ぐいぐいと押しが強く、いつものオリヴィエからは創造がつかないほど積極的だ。

「もしかして、エッチを……教えて欲しいってこと……?」

「恥ずかしくて死んじやいそうですう……っもう私は言いませんからっ。その……無理なら無理って言うてくださいあい……っ!」

「やるよ。オリヴィエは僕のために踊りを見せてくれたからね。そのお礼はするよ」

「あ……ありがとうございますうっ。私……頑張りますから、恥ずかしさを克服できるように教えてください……」

オリヴィエの表情が笑顔になったと思いきや、そのまま僕の身体にもたれ掛かってきた。

うっかり引き受けてしまったが、ちよっと早まってしまったかもしれない。

「好きな人にももらえるなんて……夢みたいです……」

「……ここはみんなの部屋だから、なるべく見つからないようにやろうか」

彼女は僕の言うことを素直に聞いてくれる様子で、言う通りにするとうなずいた。

ちよっと間近で見ると、この娘は危ないかもしれないな。可愛すぎる。

それより、しっかりと恥ずかしさを克服できるエッチを教えてあげなければ。

「この部屋だと、エッチするには危ない部屋だと思っただけ、簡単に恥ずかしさを感じるには、目隠しでもすると効果的だと思うんだ」

「目隠しですか。それなら私、自分で目隠しをしますね」

彼女は腰に巻いている布を目隠し代わりに使い、僕の言われるがままに鼻の辺りからおでこ辺りまで、目隠しをしてしまった。

本当に従順な子だなあ……。

「そのままの状態で、僕が今からすることを我慢して、恥ずかしさを克服する方向でやってみようか」

「はい、今だけでも心臓がドキドキしてますけど……あの、本当にこんなことお願いしてもいいんですか？ ティアモさんがいるのに……こんなことお願いするの、駄目だっけかかってるんですけど……」

「オリヴィエが恥ずかしさを克服できたら、それは軍の皆のためにもなると思う。だから、僕はしっかりと協力させてもらうよ」

「あ……ありがとうございます……」

もはやオリヴィエに協力をするというのは、逃げ口上でしかない。

目隠しをしたオリヴィエの身体を好きにしていと言われ、それもオリヴィエの同意の上である。

「いつも踊っているのを見ながら、オリヴィエのこことか、気になってたんだ」

「あ……ッ！ あの……ッ」

見るからに大きいと分かるオリヴィエの胸を、後ろから持ち上げるように驚つかみにした。この子は幼いような印象だが、見た目以上にボリュームのあるおっぱいだ。

指先で形を意識するように、乳房の表面だけを撫でていく。

「はああッはああんッ！ これ……ッだめですうッ目隠ししてると……すごく敏感になって、こんなことされたら……私……ッ」

「視覚がないと、何をされるか分からないからね。こうやって指で撫で回されるだけで、感じ方も変わると思うよ。あと……声を出しちゃ駄目だよ」

「はあ……はあッ、手つきがいやらしくて……ッとつてもエッチですう……んう……」

まだ胸を両手でゆっくりと触っているだけだったが、それだけでオリヴィエは全身を震わせるほど敏感に感じていた。

まるで身体全体が性感帯になったように、オリヴィエの息遣いが荒くなる。

「軍でも評判だよ、オリヴィエの踊りは。見てるだけで、すごく興奮するんだ。自分でも気付いていないかい？」

「わ……私の踊りい……そんな風に見られてるんですかあ……ッはあ、はあ、そんなこと言われたら、これから気になっちゃいますう……ッ」

胸を揉みながら、首筋に舌を這わせてみる。

オリヴィエは震えながら、脱力して僕に身体を預けてきた。

「はあッはあッ……急に舐めないでくださいあ……ッ……私もう、立っているのも精一杯でえ……はあ……ッはあ……」

「立ったまま目隠しをしてると危ないからね、僕に持たれているといいよ。そろそろ下の

方も、触らせてもらうかな」

「あ……ッあの……、そこはあ……ッ！」

オリヴィエの下着の中に手を入れて驚いた。

中はぐっしよりと濡れており、もはや下着の意味がなくなっていた。

一度手を引き抜くと、指の先から手の平までオリヴィエの恥ずかしい液体で濡れている。

「オリヴィエは……すごく感じやすいのかな、人に見られると興奮する？」

「恥ずかしい……ッは恥ずかしいですう……ッ」

「目隠しをしているから分らないと思うけど、ここには誰かが普通に入ってくるからね、今入ってこられたら、オリヴィエはなんて言うんだい？」

「え……ッ、そのお……あ……ッあッあ、だめっだめえ……ッ！」

目隠しをしたオリヴィエの胸を揉みながら、片方の手は股下へと入れ、ぐっしよりと濡れている秘所を指でかき回している状況。

誰かに見られたら終わりだなと思いつながら、オリヴィエも今の自分が置かれている状況が、ようやく理解できてきたようだ。

第七章 あの人のお話 ～スミア編～

翌日、みんなの部屋へ行くとスミアがいた。

彼女はおっとりとした性格で、何も無いところで転んだりする天然なところがあるが、やる時はしっかりとやってくれる。ペガサスナイトである。

そして、今はクロムの妻でもあった。

スミアは何故かとても怒っている様子で、僕のことを睨み付けたかと思うと、どこか悲しげな顔をしていた。

普段のおっとりした彼女からは考えられないような雰囲気を感じる。

「……ティアモのことで、あなたに言っておきたいことがあります」

「ティアモの……？」

「はい。最近、あなたの良くないウワサを聞いていました。ティアモがいるのに、ほかの女性に手を出しているというものです。でも、私もあなたがどんな人か少しは知っていましたし、クロム様もとても信頼をおいている人だということも理解していました」

スミアは一言ずつはつきりと、僕を追い詰めるように言葉を出していく。

まさか、ばれていたということか。よりによって、スミアに。

「それで……先日にも私を聞いてしまいました。何かと思って見てみると、あなたが実

の娘であるマークさんやセレナさんと……森の中で……その……」

どうやら僕と娘たちの性行為を、スミアに見られていたようだ。

スミアは少し言いにくそうに言葉を濁しているが、もはや明白だった。嫌な汗がじわりと背筋を伝う。どうすればいい。

「……とにかく、こんなことは絶対に駄目だと思います！ だから、私はティアモに話そうと思つてます。そして、反省してください！」

「ちよ、ちよつと待つてくれスミア。そんなことをされたら僕は……」

「ティアモは私の親友です。彼女に恋人が出来て夫婦になったと聞いた時は、心から祝福をしていました。でも、こんな女性関係が乱れた方にティアモが振り回されていると知つて、私はとてもショックです。でも、それ以上にティアモが可哀想だと思います……っ」

スミアに近付くと、彼女は涙目で怒っていた。

それだけティアモのことを想っているんだろうか、言葉で胸をえぐられたような感覚があった。

「本当に……ティアモはどうしてこんな方に……ッ！ううう……ッ」

「す、スミア、話し合おう？ 僕はティアモのことが大好きなんだ。ほかの女性のことなんてどうでもいいと思つてるんだよ」

「そんな言い方、あんまりです……っあなたがこれまでどんな気持ちで接していたか知りませんが、これ以上女性を馬鹿にしないでください……っ！」

近付いた僕を、スミアは汚いモノを払うかのように跳ね除けた。

あれ……なんだか腹が立つてきたぞ。

僕に寄つてきた女性たちは、僕に好意を持つて触れてきていた。だから、僕がどう思つて接していたかなんて、このスミアという女には関係ないはずだろう。

そして、彼女たちは僕にティアモという妻がいることを知つて寄つてきたのだ。

「反省してください、そしてティアモと話をすればいいんです！ こんな人がクロム様の親友だなんて……っこんな……ッ！」

これ以上、限界だ。一刻も早く、この女を喋らせるのをやめにしよう。頭で判断するよりも早く、無意識の内にスミアの口を手で押さえていた。

「んん……ッ！？」

「スミア、少し黙つていてくれないか。僕はティアモが好きなんだ。だから、誰にも邪魔はさせない。スミアも例外ではない。大人しく、黙つてもらおうよ……っ」

多少強引だが仕方が無い。この女は僕の家庭を壊そうとしている。

口を押さえたままスミアの身体を抱き寄せると、そのまま首筋を舐めてあげた。

「んんっっッっ！！！！んッ、んん！！」

「何を言っているか分からないけど、スミア。君は僕を怒らせすぎた。ちよつと強引だが

……僕のモノになってもらおうか」

「ん……ッ!??」

空いている片方の手をスミアの胸に回す。普段から大きな胸だと思っただけだが、実際に触ってみると手に収まりきらない、ボリュームのある乳房だと感じる。

肉欲を持って余していそうな乳房をおもいきり驚つかみしてやった。

「ふ……ッふ……ッ……ッ!?!」

「大人しくするんだ、スミア。未来から来た君の娘はシンシアだったかな、もしこれ以上抵抗をするようなら、あの子を君の代わりに犯すよ?」

「ん……ッ!?!」

さっきから暴れて抵抗をしていたスミアだったが、僕の言葉にびくと反応を示した。娘のシンシアが予想以上に効いたようだ。身体を震わせながら、棒立ちの状態になる。

「……ぐうッ!?!」

その直後、スミアの手を押さえていた指に鋭い痛みが走る。

この女、僕の指を噛みやがった。

「っはあッはあ! あなたは最低な人です! こんな……ッこんなことをするなんて……信じられません……ッそれにつ私だけでなく、シンシアにまで手を出そうとするなんて、ほ……本当にこんな人がクロム様の親友だなんて……ッ絶対に、絶対にあなたをこの軍から追放しますっ!」

指を噛まれ、スミアを押さえていた手を離れた隙について、スミアは僕から距離を取って離れていく。

この女……………。

スミアは部屋の入り口に向かって少しずつ距離を縮めており、僕から逃げようとしている。ここで逃げられたら、僕は本当に終わりだろう。

幸いなことに、手元には魔導書があった。僕は本当についている。

これがあれば、大丈夫だ。僕は気付かれないように、スミアに向かってゆっくりと腕を振りかざした。

「な……何をやる気ですか……!?! まさか、私に魔法を……ッ!?!」

「残念だけど、少し気絶しててもらおうよ。取り返しがつかなくなる前にね!」

彼女を攻撃して、怪我をさせるというつもりはなかった。

ただウインドの魔法で風を起こし、少し気を失ってもらおうと思っていた。

だが、僕が魔法を打ち出す前に、彼女は目の前で足元から崩れ落ちた。

何事かと思っただけで、後ろから人影があらわれた。

「……無用心ですよ、父さん。こんなところで、魔法なんて使っちゃ危ないです」

「マーク……………」

スミアの後ろから現れたのは、僕の娘のマークだった。

「途中からでしたけど、話は聞かせてもらいましたから、安心して父さん。父さんを陥れようとするなんて人がいたら、私が消しますから」

「助かったよマーク……ありがとう。でも、消すなんて物騒なことは言っちゃ駄目だ」

マークは笑顔を見せながら、僕に近付いてきた。

どうやらスミアの首筋を後ろから叩いたことで、気絶させたようだ。

「私には父さんしか必要ありませんし。……ここは誰が来るか分からないから、スミアさんを移動させましょう。私の天幕なら空いてますから……そこでいいですか？」

「ああ、それでいい。マーク……本当に助かった、ありがとう」

「お礼なんて、また今度たっぷりしてもらいますから、ほら、今は早くスミアさんを連れていこう、父さん」

僕は今日ほどマークが娘だったことに感謝したことはないかもしれない。

スミアの身体を起こして腕を肩に回すと、彼女を引きずるようにして部屋から出て行った。

もしここに来たのがマークじゃなかったら……と考えると、冷たい汗が流れた。

* * *

「じゃあ私は外を見張っていますから、父さんは好きにやっちゃってくださいね」

「ああ……気をつけて見ていてくれ、マーク」

普段マークとセレナが使用している天幕の中で、僕は足元に横たわるスミアを見下ろしていた。この女のせいで、危ないところだった。

「ふーっ……ふーっ……」

スミアは既に目を覚ましているが、身動きが出来ないように服を脱がせ、その後に両腕を後ろで交差して縛っていた。声を上げて叫ばれないように、口には布を噛ませて頭の後ろで縛っている。

上半身は裸で、下は何も脱がせていない状態だ。

「さてと……、これようやくよく会話が出来るかな、スミア。君は身動きが取れないし、今は何もすることが出来ない状態だけど、何か言いたいことはあるかい？」

「フーッ、フーッ……!!」

スミアは身をよじらせながら、僕を睨んでいた。

脚をバタつかせて暴れようとしていたので、スミアの上に覆いかぶさって大人しくさせる。

「これから僕は、スミアのことを滅茶苦茶に犯してあげようと思うんだ。ここにね、僕の

を何度も何度も挿れてあげるよ。イキそうになったら、我慢しないでたっぷり中に出すし、スミアが泣いて嫌がって、僕にすがりついても、何度も中に出してあげるよ」

「……っっ！！」

それを聞いた途端、スミアは顔を横に振って拒絶を示した。

これから犯されるであろうのか、この天然なおっとり女には分からないだろう。

僕はスミアがティアモの親友であるということには、まったく負い目を感じることなく、スミアの豊満な胸を眺めながら手を伸ばした。

「さっきは全然堪能できなかったけど、やっぱりすごいねスミアのおっぱいは。揉みごたえがあつて、手に収まりきらない。もう母乳は出るのかな？」

「ふうう……っんううう……っっ！！」

胸を両手で下から持ち上げると、ボリュームのある乳房が盛り上がった。こうして手で遊んでいるだけでも股間の肉棒が熱くなってくるが、スミアは涙を流しながら、何かを言っているようだ。

「ほら……乳首も堅くなってきた。スミアはこんな状況でも感じてしまう変態なんだよ。クロムが見たら悲しくなると思うよ」

「んう……っんんん……っっ」

膨らんできた乳首を摘み、指の間で潰すようにコリコリと遊ぶ。

あまりゆつくりとしている時間はないと思い、スミアのスカートの中に手を入れた。

「ああ、なんだ……もう濡れてるじゃないか。スミアはやっぱり変態だったんだな。乳首を弄られて、犯される状況で感じてるなんて、普通じゃありえないよ」

スミアの秘所を見て下着の上から触ると、既にぐっしりと濡れていた。

ここまで感じやすいとは思わなかったが、手間が省けたというものだ。

指先で女である割れ目のスジをなぞり、下から上へと擦るように撫であげる。

「ふー……っ、ん……っんん……う……っっ」

「あれ、なんだか気持ちよさそうだね。こうやって指でされるのが好きなのかな。でももうじれたいし、僕のこれを挿れさせてもらおうよ」

スミアの目の前で、肉棒を取り出して見せ付けてやった。

さっきから我慢していたからか、肉棒はすっかり脈を打って堅くなっていた。

振り返った逸物を、スミアの顔に擦り付ける。

「うう……っううう……っ……っ……っっ！！」

「今からたっぷり犯してあげるけど、スミアは僕のでイカないようにね。もし気持ちよく感じてしまったら、スミアは浮気をしたのと同じになるよ」

「んん……っんん……！！！！」

スミアは涙を流しながら、必死に僕を見ていた。

こんなのは浮気ではないと、責めている目だ。

「実際、自分の結婚相手ではない男のもので感じてしまったら、それは浮気だと思うよ。僕はスミアにそれを仕込むつもりだ。何度も何度もチンポで犯して、スミアを気持ちよくしてあげるよ。それでも我慢している女でいられたら、僕の負けだ。スミアを解放する」
スカートをめくり、下着をおろす。既にメスの匂いであふれ返っているそこは、いつでも肉棒を挿入すれば受け入れてくれる準備ができていた。

スミアの脚を開こうとすると、彼女は脚を閉じて抵抗をしてきた。

「んううーっんっんんんー！！！」

「まったく……っ往生際が悪いよ。これ以上抵抗をするのなら、本当に君の娘であるシンシアにも手を出すよ？ それでもいいのなら、暴れるといい」

「……っっ！！！」

すると、スミアはゆっくりと、閉じていた脚を開いていった。

大胆に、自分の旦那ではない男に、ぱっかりと脚を広げていた。

身体を震わせながら、従いたくもないのに従うしかない、そんな必死さが嗜虐心を駆り立ててくる。

スミアの顔は僕を見ないようにするためか、首を横に反らしていた。

「あーあ、簡単に股を開いちゃったよ。そんなに自分の娘が大事なんだね。でも、いい心がけだ。これで思う存分に、スミアの中にチンポを挿れられるからな……っ」

「ふーっっ……ふーっっ……んんん……っっ！！！」

ズプッ、ズププッぐちゅっぐちゅっズプッ！！

秘所の割れ目に押し付けた肉棒は、スミアの態度とは裏腹に、あっさりと膣内へと飲み込まれていった。

*体験版はここまでになります。
続きは製品版でお楽しみください。